

3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの生育初期の管理	(今月の作業のポイント) ○デルフィニウムの生育初期の管理 ○シクラメンの管理 ○年末出荷電照ぎくの消灯 9月中旬に植え付けた‘さくらひめ’は(写真下)、12月中旬から1番花を出荷できる見通しである。12月～翌6月に連続出荷するためには、9月中旬～11月上旬に2週間間隔で定植を行う必要がある。どの定植時期においても生育初期管理は共通しており、次のア～ウに留意する。特に定植後10日までの管理が重要であり、管理の仕方で採花時期や品質に差が生じる。  写真 定植直後の‘さくらひめ’ ア かん水管理 定植から1週間は土壌を乾かさないようにし、その後は徐々に水を控える。 イ 施肥管理 活着後(定植後約1週間)に、窒素：リン酸：カリ＝1：1：1程度とした液肥を、窒素濃度 100 mg/L (ppm) に希釈して施用する。風の強い日は葉からの水分蒸散が増大するため、葉水によるしおれ防止を心がけ、生育を促進させる。初期の肥料が多いと生育不良になるため、土壌分析を実施し EC が 0.3～0.5 ds/m の範囲になるようにする。 ※希釈倍率の算出 $\text{倍率} = \text{成分}(\%) \div \text{希釈濃度}(\text{ppm}) \times 10,000$

項 目	作 業 内 容
(2) シクラメンの管理 (3) 年末出荷電照ぎくの消灯	ウ 温度管理 デルフィニウムに適した温度帯は昼温 25℃・夜温 15℃であり、10 月は適温に近い日が多い。しかし気温の変化がまだ大きく、10 月上旬は高温に、反対に 10 月下旬は低温に気を付ける。換気やサイドの開閉により温度を調節し、10 月中旬以降は夜温が 10℃以下にならないよう保温する。 病虫害では、うどんこ病、バッタ類やヨトウムシ類、ナメクジ、ホコリダニの防除を心がける。 10 月中旬以降は夜温が低下するため、15℃以下にならないよう保温・加温を行う。また、ハウスを閉めると灰色かび病の発生が多くなるため、暖房機の送風ファンや循環扇等で空気を循環させる。 肥培管理は、窒素：リン酸：カリ＝2：1：3 程度とする。窒素濃度で 75～100 mg/L (ppm) の液肥を基本に、株の状態を見ながら施用する。また、幼葉の生長と花芽の充実、花首の徒長防止、さらに鉢のバランスを良くするために、月 1 回は葉組みを行う。併せて、病害の発生源となる枯れ葉を除去する。 年末出荷用電照ぎくは、栽培温度条件や品種などによって異なるが、一般的には出荷予定日の 50～60 日前である 10 月上旬～中旬に消灯を行う。開花時の草丈は消灯時の約 2～2.5 倍となるため、消灯時には 35 cm 以上の草丈を確保しておく必要がある。 うらごけ防止（上位葉の葉面積確保）や舌状花の増加など、切り花品質の向上を目的に再電照を行う。最初は、再電照を実施する日数分だけ、通常の消灯日より早く消灯を行う。次に、消灯後 12 日目頃に 3～4 日間程度、再電照を行う。実際は、花芽の発達ステージ（次ページ図）が総苞りん片形成期～小花形成期に達している頃に再電照しなければ効果が劣るため、再電照開始前に顕微鏡で花芽発達ステージを確認する必要がある。 再電照により花首が伸びやすい品種は、花首の伸長を抑制するために、蕾が小豆大の頃にビーナイン（わい化剤）を散布する。

項 目	作 業 内 容
	未分化 (0) 生長点肥大 (1) 総苞鱗片形成 (2~3) 総苞鱗片多数 (3~4) 小花原基形成 (5) 頂部は小花 原基未形成 (6) 頂部まで小花 原基形成 (7) 花卉形成 (8) 花卉伸長 (9~10)

図1 キクの花芽形成過程 (岡田 1963)

(作成 農林水産研究所)